能登・七尾
一本杉通り

寄り合いどころ

一本杉Café

新しい生活様式の模索

社会医療法人財団董仙会　本部長　進藤浩美
（認定作業療法士）

はじめに　一本杉caféとは

一本杉caféは、2015年11月4日、認知症カフェにとどまらず、保健室のように、学習塾のように、喫茶店のように、茶の間のようにを目指して、毎週水曜日14:00～16:00で開始した。職員によるcafé講座、健康チェックとして、血圧・体温の測定、希望に応じ電子カルテへの記録サービスを実施し、参加費は200円、コーヒー等の飲み物を提供した。七尾市社会福祉協議会発行の介護支援ボランティア施設を申請し、登録者には飲み物を出す協力を依頼し、ポイントを付与した。ポイントにより、5,000円が還元される。参加者は、10人から20人程度であった。七尾市からの補助・支援金はない。

新型コロナウイルス感染症予防のため4月から中止、7月再開に向けて

2020年7月再開に向けて、介護統括副部門長をプロジェクトリーダーとし、メンバーを職員から公募、MicrosoftのTeamsを利用しプロジェクトを実施した。ミーティングはTeamsでオンライン実施、ミーティング以外での気づき、意見交換はチャット機能を使用し、メンション（メールに自動でチャット更新連絡）を利用した。資料共有、資料作成は、同期機能を利用した。水分補給のために、マスクを外すリスク軽減のために、時間を1時間に短縮することとした。

cafe講座、プログラムの検討

まず、1ヶ月のテーマをつくり、それに合わせて、café講座を企画し講師を職員から探した。7月は、“コロナに負けない生活“とし、１週目は、新型コロナウイルスについての知識を深めるために、当法人発行の広報誌で学習し、感染管理認定看護師による感染予防のため手洗いの仕方を学び、薬剤を使用して手洗い、洗い残しテストを実施した。そして、フェイスシールドづくりを行い、フェイスシールドをつけての理学療法士・作業療法士指導の体力アップ講座を行った。

2週目は、健康は足元からということで、糖尿病指導士看護師、フォットケア研修修了看護師によるフットケアとごみ袋で防護エプロンをつくり、家族の方でインフルエンザも含め感染した者が出た場合の接し方について学んだ。

3週目は、夏野菜・免疫力アップレシピを管理栄養士から学んだ。4週目は、ベンリー七尾店による感染を防止する掃除の仕方と持ち運べるハンドジェルづくりを学んだ。5週目は、振り返りを行い感染予防の知識を深めた。

環境面での配慮

感染予防のための環境、今まで行っていなかった新しいやり方を決めた。

①オープンな空間での安心感の提供：戸を開け、窓を開け換気とともに、視覚的にも安心感を与えられるようにした。
②足元からの持ち込み防止：足マットを設置し、足元から中にもちこまない指導を行った。
③手指消毒・健康チェック：手指消毒機を設置し、非接触体温計で体温を測定し、血圧計は使用ごとに消毒した。
④テーブルを撤去し、スタッキングできる机を購入し、3密防止：4人掛けテーブルを撤去し、３密とならない環境を構築。
接触面(手を置く、触る、掴まる)が削減できる幅45cmのテーブルを購入し、すぐ消毒、すぐ片付けられるようにした。
⑤フェイスシールドをつけての運動・講座の実施：マスクの付け外し指導も実施。

考察とまとめ

新しい生活様式で、一本杉caféを再開するためには、下記が重要と思われた。

- 職員で知恵をふりしぼる
  職種を超えて、立場を超えて、知恵を出し合い、常識を超えてNew Normalを考えていくためには、いろいろな職員にプロジェクトメンバーとして関わってもらうことが有効である。
- マスクを外すリスク回避のために、時間を短縮し水分補給を軽めに実施した。
- 三密とならない環境準備
  空間をオープンにすることで安心感を与えること、4人掛け机を撤去し、45cm幅机が有効だった。
- 感染予防に対する利用者の知識力を向上させることもcafé講座のミッションと考える。